



■ フォトエッセイ ■

インパールから国境の町、モレへ

写真・文 梅崎 創
So Umezaki

インド北東部、マニプル州の州都インパール。日本人にとっては忘れ難い地名ではあるものの、第二次世界大戦中の激戦区のひとつということ以外はあまり知られていないかもしれない。

インド北東部は、北方を中国、ブータン、南東をミャンマー、南西をバングラデシュに囲まれており、インド他地域とはシリグリ回廊（通称チキンネック）でつながっているだけである。一九世紀にイギリスに植民地化される以前は複数の民族国家・藩王国が存在していたが、一九四七年のインド独立に際してインドに併合された。もともと言語や宗教が異なっていたこともあり、インド北東部では反インド武装闘争や民族間の衝突が繰り返されてきた。このため、インド政府は内務省傘下の準軍事組織であるアッサム・ライフルズに治安維持や国境警備にあたらせるとともに、インド北東部への入域を、外国人のみならず他地域に住むインド国民に対しても制限してきた。このようにインド北東部は外部から隔絶されてきたが、近年、この制限は緩和されつつある。例えばマニプル州に関しては、外国人に課されてきた制限区域入域許可制度が二〇一一年に廃止されている。

また、一九九五年に隣国ミャンマーとの国境貿易が認められ、ミャンマー国境の町モレに陸路税関出張所が設置されて以来、インド・ミャンマー間の経済交流も少しずつ活性化されてい



2頭のカングラジャに守られたマニプル藩王国の王宮、カングラ。1891年の対英戦争に敗れてからはイギリス軍、インド独立以降2003年まではアッサム・ライフルズの宿営地とされていた



路上で焼き捨てられたミニバン (2011年5月撮影)



東マニプル丘陵の入り口、パレルの町並み



テングノウバル付近からの眺望

る。四一品目の農産物・日用品については無税でのバーター貿易が認められており、国境の両側にあるマーケットでは事実上、それ以外の品目についても活発な取引が行われている。近隣住民は簡単な登録をするだけで、パスポートを使わずに国境を越えることが認められているため、インパール市民もミャンマーの農産品や中国製の必要品・家電製品を求めてミャンマー側の町タムを訪れている。

インパールからモレまでは国道三九号線を通じて一〇キロ、二時間半〜三時間程度の道程である。インパール市民の足として、タタ社製多用途車のSUMOがインパール⇨モレ間を日帰りで往復している。通常、インド側の輸入超過となることを反映して、往路は三五〇ルピー、より重い荷物を運ぶ復路は四五〇ルピー（一ルピーは約一・四三円）とのことである。

二〇一一年五月と二二年五月の二回、私はモレ／タム国境を視察する機会に恵まれた。ここでは、インパール市内の出発地点からの走行距離、経過時間とともに、モレまでの道程をご案内しよう。インパール市の町外れにあるマニプル大学の前を通り、田園地帯を抜けて最初の町、トウバルまでは二三キロ（二五分）。現職のマニプル州首相のお膝元であるこの町では新しい商店街や病院の建設が進められている。この商店街ではミャンマー経由で輸入される中国製品も購入できるようになるとの話がある。市民の足であるオートリクシャーでは、インパールからトウバルまでは三〇〜四〇ルピーで来ることができる。

さらに田園風景のなかを進むと、カクチンの町



谷間に架かる橋。
車両のすれ違いは
できない



モレのマーケットに野菜や雑貨を運ぶ親子連れ



国境の町、モレ

が右手に見える。ここまで三四キロ（四九分）。マニプル州ではアルコール飲料が禁止されているのだが、実際には様々な所で米を原料にした地酒が作られているという。カクチン産の地酒は特に人気が高いとのことである。東マニプル丘陵の麓の町、パレルまでは三九キロ（五四分）。町の入り口には警察の検問所がある。ここまではインパール盆地を通っており、標高七六〇〜八〇〇メートルの平坦な道程である。片側一車線ではあるものの道路の舗装状況もよい。

東マニプル丘陵の峠道に入ると道幅がやや狭くなり、五七キロ地点（六五分）のアッサム・ライフルズの検問所を過ぎた辺りからは道路の補修が間に合っていないところが散見されるようになる。雨の影響で路肩が崩れている所もあるが、車両の通行が危ぶまれるほどの悪路というわけではない。道沿いでは焼畑で野菜が栽培されている。徐々に標高が上がり、国道三九号線は稜線付近を縫うように走る。七二キロ地点（八四分）のテングノウパル集落は標高約一五〇〇メートルの見晴らしのいい山頂付近にあり、ここにもアッサム・ライフルズが検問を張っている。

一転して下り坂に入る。二〇一一年五月にこの道を通った際には、八二キロ地点の路上にマンガーを満載したミニバンが焼き捨てられていた。事情を知る青年によれば、近隣の集落間の境界線を巡る争いが原因であり、反政府運動とは直接の関係はないとのことであった。九一キロ地点（一一三分）では標高四〇〇メートルを切り、その谷間を流れる小川を越えると再び上り坂になる。一〇二キロ地点（一二二分）では標高七〇〇

2011年6月までの3年間、東アジア・アセアン経済研究センター（ERIA）に出向、アジア総合開発計画、ASEANの交通協力に関する5カ年計画、ASEAN接続性マスタープランなどの策定に携わる。



アッサム・ライフルズ、マニプル支部の青年。
左肩のエムブレムはカングラジャ



モレ貿易センターに掲げられたアジア・ハイウェイの路線図



モレ／タム国境の橋



小高い丘の上の寺院から望むタムの町並み

メートルを越える見晴らしのよい所に、小さな集落とともにまたしてもアッサム・ライフルズの検問所がある。ここからは下り坂であり、一〇九地点（一四一分）の警察の検問所を越えるとそこがモレの町である。

唯一車両で通過できる国境は二色に塗り分けられた鉄橋。白い部分はインド領、黄色い部分はミャンマー領である。ここからカレミョーまでの約一六〇キロ区間はインドの国境道路機構により整備され、二〇〇一年に印緬友好道路として開通されている。二〇一二年五月下旬の印緬首脳会談では、この区間の七一橋梁の補修・改善や、カレミョー―モニワ区間の整備、国境地域開発などについての合意がなされた。また、インパールとマンドレーを結ぶバス路線の開設も予定されており、陸路、モレ／タム国境を通じるインドとミャンマーの接続性は、徐々にではあるが確実に強化されてきている。

アッサム・ライフルズの青年によれば、ここ数年は政府高官によるモレ／タム国境視察が増加しており、その警護に当たる回数も増えているという。

彼自身は国境を越えたことは一度もなく、国境を越えて様々な国を訪問する機会を持つ私たちを羨んでいた。今回彼らと共に実走したルートは、トルコを西端、日本を東端とするアジア・ハイウェイ一号線の一部なのである。彼が何度も任務で往復しているこの道は私の故郷にもつながっているんだと言うと、彼は少し不思議そうな顔をしてから曖昧に微笑んだ。